



The Kyoto University Library Bulletin

静脩

1977年6月

Vol. 14, No. 1

京大図書館への期待

前教育学部教授 小倉 親 雄

このたび京都大学を停年退官し、この大学との公的ななかかわりからは解放された時点で、とくに深い関心を持ちつづけてきた図書館に関することどもが、学生時代をも含めて、いましきりにしのばれてならない。

それにしても忘れがたいのは、昭和11年の1月24日、おし迫った卒業の日を前にして附属図書館の閲覧室が焼失した時のことである。そのとき私は文学部史学科の3回生であったが、現在の文学部陳列館がそのまま当時は史学科の建物であった。したがってこの閲覧室とは至近の距離で相向って位置し、また歴史関係の図書、資料には、附属図書館に依存する面が少なくなかったために、この図書館は私の学生生活に深い関連を持ちつづけてきた。私が急を知って駆けつけ、ぼう然とその焼跡に立ちすくんだのは、すでに建物は焼け落ちて、余じんから立ちのぼる湯煙が附近をおおっていた正午間近の時刻であったが、職員の後片づけを手伝いながら、それから後のことを気遣い、いろいろに語り合ったことがいまもあざやかに思い起こされる。そして卒業後私自身がやがて図書館と道を共にするに及んで、外部に在りながらも、京大図書館その後の足どりは、しぜん関心を引かずには措かないものであったが、さらに昭和24年の末以降は、自身この図書館の職員に加わ

り、そのあと新しく教育学部に設置された図書館学講座にかわり、在職中を通じ何んらかの形で図書館との結びつきを保ってきた関係から、いままた退官とともに、新たな感慨につきまといわれる。焼失した閲覧室は明治32年の建物で、本学の設置が決定されると同時に構想され、2年後に建築されたものであった。すなわち当初予定されていた4分科大学のうち、まだ理工科大学のみしかなく、1・2回生を合わせての学生数は僅かに70名、全学蔵書が4万冊をやや上回った程度のときであった。したがって優に150の座席を置くことのできたこの閲覧室は、在学生の倍数を同時に収容してなお余裕を残し、大正13年現在の本部大ホールが新築されるまでの25年間、大学にとっての主要な式典・行事の都度、その式場に転用されたほど、本学草創期においては主要な建物であった。それは図書館に対する理解のきわめて深く、その便宜を優先し、整備・充実に意を用いた初代木下総長の努力によるものであった。

しかしながら、草創期におけるこの主要建築も、その後の37年間、増築・改修はもちろんのこと、内装的にもほとんど新たな手を加えた形跡のない平屋建で、閲覧机もすでに古色にまみれ、椅子も竹のすのこ張りの安定性を欠くものが多く、全学蔵書数はすでに、110万冊を超過し、附属図書

館のそれも28万冊に近く、学部学生も4,000人を数えるにいたったこの昭和11年の時点にあっては、すでに記念物的な存在であり、その機能に期待し得る面はきわめて限られたものであった。このような欠を補う措置として昭和8年以来、法経第4教室の2階を第2閲覧室と名づけ、指定書・辞書類などを安全開架制のもとにおいて、臨時に200余席を準備することになっていたものの、時間を区切って受けつけ、100メートル以上も距った書庫との間を、雨の日は傘をさし、図書の出納に当らねばならなかった図書館職員の姿に接することは、われわれ学生にとってもまことに忍びがたいものであった。同時にまたこのような実状は、とくに蔵書の大、ついで職員・学生の増加と、図書館利用の便宜双方の間に、いよいよ拡大されてきた大きな亀裂、そのアンバランスの象徴的なものを見せつけられる思いでもあり、また大学図書館の在り方について考えさせられることの多いものであった。

昭和11年における閲覧室の焼失は、このような状況をさらに倍化し、そのアンバランスを極限の状態にまで拡大した。幸い事務室・書庫への類焼は免がれ得たものの、3,000冊に近い参考書類が被災し、カード70万枚を越える閲覧用目録が烏有に帰して、検索の鍵を奪われてしまっ^ては、何人とも堪えがたい感を深くした。そしてこの閲覧室に代るところとして、急拠3月末までの暫定期間、法経第4教室を充当することになったとはい^{うものの}、しよせんそれは教室であり、座席のみをもつ単なる空間にすぎず、図書館の便宜という限りにおいては、ほとんど満たされることのない、まことに索莫たる思いを抱いて卒業して行った記憶がいまも生々しい。そして卒業した年の9月からは、本部大ホールを仮閲覧室に使用することになったが、それも昭和14年3月をもって打ち切られている。その後は戦中・戦後に連なる時期

であったとはいえ、図書館の便宜はいわば極限・最悪の条件下におかれ、書庫と閲覧室との隔絶、図書館機能の半身不随的狀況は結局20年間に及んでいる。すなわち昭和30年12月、現在の新書庫5階が完成し、ここに予定の図書を収納し終った時点で、この状況は部分的には解消されたが、しかしながら附属図書館現在の建物は、昭和10年頃の実状を背景とした規模をさらに3分の2程度に縮小して成ったものである。したがって今日に至る間にはすでに40年の歳月が介在しており、その間全学蔵書はやがてその4倍に近く、学部学生の数だけでも当時の3倍近い数字を記録するに至った現時点からすれば、すでに相当過去の時代に所属するものとなった。

一方本学の蔵書は昭和8年、ちょうど私が入学して間もない頃、100万冊を突破したことが報ぜられた。そして建物・施設こそまことに貧弱だが、蔵書数においてはまさに東洋一との声をしばしば聞かされたが、蔵書の大が施設・機能の不備・弱体をカバーしているかのごとくに聞こえるこのようなことばは、学生たちの耳にも何かしら空々しいものであった。この昭和8年という年は、本学創立から36年、しかしその数字が200万冊に達するのに要した年数はそれより10年少い26年目の昭和34年であり、さらに300万冊にはその半数にも満たない12年目の昭和46年、そしておそらくは昭和55年前後の年をもって400万冊に到達するものと予想される。このように創立後83年にしてこの大きな数字を記録しようとしている京都大学は、アメリカでは3番目に古いイエール大学が、これと同じ冊数を記録するために200年以上の年数を必要としたのと比較しても、まさしく驚異的なものといえるであろう。

蔵書はどのような経路をたどってその大学に帰属することになったとしても、それを共有の財産とし、管理・運用の全学的効用を図る前提のもと

に、どの大学もその歩みをつづてきたといえるであろう。京都大学80年の歴史の中にも、そうした証跡が、それぞれの段階において記録されている。すなわち大正2年には、時の沢柳総長自らがきわめて積極的に対処しようとしたいわゆる「図書統一問題」があり、それは16年後の昭和4年、新城総長によって引きつがれ、全く同じ趣旨のもので再び採り上げられ、審議に附されている。全学の蔵書がそれぞれ32万・84万冊に達し、そのうちの8割近い25万・65万冊が、各部局を始めとする学内各所に置かれていた当時のことである。そしてそれら各所には研究上不可欠なもののみをとどめ、他を中央館に集中するとともに、合わせて図書業務の統一を図ろうとするものであった。要するに学内各図書館単位の蔵書実績のうちから、必ずしも研究上不可欠としないものを物理的に集中化して行くことによって、全学的効用を志向す

るものであり、とくに昭和4年における「図書館新営案」はその集中化を前提としている。したがってそれは、中央館に依存し得る面を大きく打ち出し、各図書館単位においては、真に不可欠なもののみを収集累積を可能にし、専門集書としての高次の蔵書構成を援助し得る積極的な体制を整えようとするものではなかった。このことがいまきわめて印象的に思い起こされる。

戦後図書館の制度・行政・運営の改善について、今日に至る間、その重要課題が相ついで採り上げられてき、慎重な討議に附されている。私は新たな飛躍に対する期待をこめ、また本学図書館の歴史を顧み、何よりもまず現在・将来における蔵書の大と、図書館利用の全学的便宜とのバランスを、そして学内各図書館単位における専門集書としての健全な発展を心から念ずるものである。

Journal Citation Reports について

— 紹介と実際に使ってみて —

理学部・物理学図書室 慈 道 佐 代 子

最近附属図書館に、Journal Citation Reports (1975年版) (以下 JCR という) が備えつけられた。これはアメリカの Philadelphia にある Institute for Scientific Informations が出版している自然科学全般の雑誌に関する利用統計書である。今回の版は、1969年の data に基づいて作成された予備版を更に充実した形で1974年までの data を収録しており、Science Citation Index (この詳しい記事は「静脩, Vol. 13, No. 1, 1976年9月号」を参照) の新しいセクションとして付け加わっている。

JCR は ① Journal Ranking Package, ② Citing Journal Package, ③ Cited Journal Package と3つの package で構成されており、これらは

個別ではあるが、相互に関連のある形で提供されている。JCR がどんなものかを、後で述べる物理学教室の調査に利用した ② Citing Journal Package を例にとって説明したい (図1参照)。この図は、1974年出版の Annales of Physics が引用した雑誌の引用回数を各雑誌の出版年度別に示したものである (但し、1つの論文内で同一論文の引用は1回と数える)。例えば Physical Review Letters についてみると、1974年出版のものは3回、1973年のものは30回引用されていることになる。そして total は1974年出版の Annales of Physics が1974年までに引用した雑誌の総引用回数で3029 (*印がついている) になる。又、各雑誌の頭にある数値は、その雑誌に掲載さ